

[16]

音譯語における語形の選擇

——ナポレオンおよびワシントン为例として——

千葉 謙 悟

0. はじめに

近代以降に中國語の語彙へ導入された多くの事物や概念は、歐米言語の語彙を自國の音韻體系に適合させた、いわゆる音譯語によって導入されているものが少なくない。

さらに言えば、近代に創造された音譯語の中では、あまり指摘されないものの無視できない勢力として固有名詞の一群が挙げられる。近代以前には歐米の地名や人名は知られていないか、またはごく一部の人々にしか知られることがなかった。しかし西洋の事物や知識が流入し始めるにつれ、その背景として西洋の歴史や地理も紹介されることとなったのは周知のことである。

現在の中國語で使用される歐米の固有名詞は、當然ながら決してその歐米言語の發音そのものではなく、それを中國語の音韻體系の中で適應させた形を持つ。そしてそれらは無規則に變形されているのではなく、何らかの傾向に従って變化しているという見方をするのが妥當であろう。そうした傾向の一つとして千葉 2003 では「基礎音系シフト」という現象を指摘したが、本論ではそれに當てはまらない事例についてその理由を検討したい。「基礎音系シフト」とは非言語的理由による音譯語創造の中心地の移動（千葉 2003 にとりあげた例でいえば、來華宣教師の傳道活動の中心地の移動）に伴って音譯語形の基礎方言が變化し、結果として創造される音譯語形そのものがある時期を境として變化するという現象である。

本論では 19 世紀中國語における外國人名を取り上げる。具體的にはワシントンとナポレオンという歐米史上の有名な人物に對する中國語語形の變遷をたどる。この二人は 19 世紀の漢文西學書にしばしば登場する人物であり、19 世紀を通してその語形變化を詳細に跡づけることができる材料といえよう。ワシ

トンやナポレオンといった有名人の中國語形は外國固有名詞の中でも使用頻度が高いものの一つと思われる。典型例としてその變化と定着の過程を考察することは、音譯語研究全體にとっても示唆を與えるものとなりえよう。

1. ナポレオンの音譯語

1.1. 語形の変遷

ナポレオン・ボナパルト (Napoléon Buonaparte) は 19 世紀初頭まで活躍していたことから、本論が対象とする 19 世紀にあつてはほぼ現代史上の人物であり、従つて中國語による西洋地理・歴史關係の文獻によく登場する。ナポレオンは現在の中國語では「拿破侖」と表記され、普通話では [na³⁵p'o⁵¹luən³⁵] と發音される。

ここで 19 世紀におけるナポレオンの表記の變化を見ると、その表記がある時期を境にほぼ一種類に統一されていることが読みとれる。それは表 1 から容易に見いだせる通り、おおよそ 1850 年代といふことができよう。

〈表 1：ナポレオンの表記〉

	表記	書名	刊年
(1)	那波倫・波那良・波羅穩・波那里穩	外國志略	1830 年代
(2)	那波倫	萬國地理全圖集	1830 年代
(3)	那坡里雲・拏破戾翁・拿破戾翁	東西洋考每月統記傳	1834-38
(4)	那波釐穩・拏破連・波那西 ¹⁾ 耳・般那畢地	澳門新聞紙	1839-40
(5)	那波良 ²⁾	新釋地理備考	1847
(6)	拿破崙	瀛環志略	1848
(7)	拿破侖	地理全志	1853-54
(8)	拿破倫	地球說略	1856
(9)	拿破侖	六合叢談	1858.1
(10)	拿破侖	校邠廬抗議	1861 成 1888 刊
(11)	拿破侖	萬國公法	1863
(12)	拏破侖	乘槎筆記	1866
(13)	拿破崙	申報	1880.1/24
(14)	拿破崙	申報	1882.7/31
(15)	拿破侖	弢園文錄外編	1882
(16)	拿破侖	佐治芻言	1885
(17)	拿破倫	遊歷瑞典那威聞見錄	1880 年代
(18)	拏波倫	遊歷西班牙聞見錄	1880 年代

(19)	拿破崙	三十一國志要	1895
------	-----	--------	------

ナポレオンという固有名詞は「那翁」などという略稱による例外を除けば、他の外國固有名詞と同じく一貫して音譯語形を持つ。中國語においても、音譯語は基本的に音聲上の類似をもとにして創造されている以上、そこには第一に音聲的な理由が存在しているものとするのが自然である。従って、まずはナポレオンを 19 世紀の中國語ではどう發音していたかを検討したい。

1850 年代以前の語形は定まることなく、あるものはナポレオンという名だけを、あるいはボナパルトという姓を、あるいはその雙方を表そうと試みている。その結果、用いられる漢字から字數に至るまで統一性を欠くことになった。

一方で現在の語形「拿破侖」は 19 世紀の推定音（聲調略。以下同）によれば以下の通り。

〈表 2：「拿破侖」の各地における發音³⁾〉

地點	發音
廣州	nap'olœn
上海	noɤ'oləɲ
南京	nap'olun
北京	nap'oluan

表 2 によれば「拿破侖」はどの方言の讀音でも相對的な差が小さいと言えるだろう。その中で主要な差異としては、Napoléon の第一音節に相當する「拿」という漢字の讀音が上海以外の地では前舌の廣い母音 [a] であるのに對し、ひとり上海では圓唇母音 [o] になることが挙げられる。

このことは「拿破侖」という語形がその上海音に従って讀まれる以前にすでに定着したものであることを示している可能性がある。千葉 2003 では 19 世紀音譯語の基礎方言が廣州方言から上海方言や官話へシフトする状況を指摘してこれを「基礎音系シフト」と稱したが、これに従えば音譯語が創造される際の基礎音系が廣州方言であった時期にあつてすでに「拿破侖」は有力な語形であった可能性が考えられよう⁴⁾。詳細な論證のためには 1850 年代以前の漢文文獻についてさらに調査する必要があるものの、1850 年代までに「拿破侖」系の語形が定着しているのは基礎音系シフトの發生以前にこの語形が優位を

占めていたことを示唆するであろう。

1.2. 「破」の選擇

表1から、(6)～(13)をはじめとして Napoléon の第二音節に相當する部分には多く「破」が用いられていることがわかる。現在、人名の音譯において英語 [po][pou] に相當する音節には普通「波」を用いることから⁵⁾、「破」は19世紀以來の「慣用」によって現在まで用いられている字であることがわかる⁶⁾。すなわち、この「破」はナポレオンの音譯語形にのみ見られる特別な用字といえることができる。

本小節では「波」などではなく敢えて「破」を用いた要因を、當時紹介されたナポレオンの傳記から解釋することを試みる。ナポレオンは19世紀に至り初めて中國へ紹介された人名であるが、早い段階でのまとまった文章はおそらく、(1)『外國志略』および(2)『萬國地理全圖集』である。やや長いが引用すれば(20)(21)の通り。引用文における強調および句讀はすべて千葉による。

(20) 有將軍那波倫者，佛國英雄也。乘虛擅權，百戰百勝，威聲大震。於嘉慶八年篡位乘尊號，在諸國以上。與英吉利，西班牙，陂路斯，義羅斯等國戰無不勝。於嘉慶十七年，傾國往攻義羅斯國，長驅直入其都，被火焚，潰而退。冰雪交侵，饑殍滿路。於是義羅斯與陂路斯國連和合從以驅佛軍，日耳曼國又乘其後。又協英吉利東國等合攻佛國。於是那波倫失位退居小島。復糾其餘黨復國，英人又合陂路斯軍擊之，那波倫敗降，遂謫死於海島。時嘉慶十九年也。(外國史略 29a7)

ナポレオンの音譯語形として「波」を用いていることがわかる。さらに、その傳記においてナポレオンを描寫する際「英雄」「百戰百勝，威聲大震」という語が見えることは注意してよい。續いて『萬國地理全圖集』の記述は以下。

(21) 及乾隆五十四年，庶民怨之廢戕其主而自擇君。於是有將軍名曰那波倫即位。十有餘年，百戰百勝，各國震怒。故於嘉慶十七年同心協力禦防，並力攻擊。那波倫敗喪，暫時退位，復回再戰。佛國王約英國及普魯社國助援。礮火迫急那波倫登英國兵船求避。英國待同俘虜，見流在大西洋孤嶼。(萬國地理全圖集 15a2-5)

ナポレオンの軍事的才能を「百戰百勝」というクリシェを用いて描寫する點

で(20)と共通することがわかる。

續いて(3)『東西洋考毎月統記傳』の記述は以下の通り。ナポレオンの人名表記に「破」を用いる最初の文獻である。

(22) 自今以往，諸國之霸，未有超於法蘭西國拏破戾翁皇帝者。乾隆五十七年，法蘭西民自操權，紛紛然，治本國改例廢置，既廢舊法，歐羅巴列國不忍坐視，而欲止其民之擾攘…拏破戾翁升遷職位，不時祿位高升，爲統領將軍…嘉慶十一年間，法蘭西軍凱旋在破魯西京都，俄羅斯國禦防不及，法皇帝莫不冲鋒，破軍也。此時當歐羅巴列國咸遵法蘭西法度，且拏皇帝之名普揚，利物不於其身。明以察微，順天之義，知民之急，仁而威，惠而信，修身而天下服。取地之財而節用之，撫教各民而利誨之…若以拏皇帝較之秦始皇及元之忽必烈或謂相似，但拏破戾翁乃爲霸中之魁矣。(『東西洋考毎月統記傳』「霸王」、道光丁酉年(1837)八月)

(22)は先に挙げた(20)(21)とは異なり、書かれた年代が明確なのも重要である(1837年)。後に見る(26)(27)とは對照的に、ナポレオンを賞賛する記述が多いことも注意を引く。「明以察微，順天之義，知民之急…」という治績についての評價はその最たるものである。

それ以上に注意すべきは「法皇帝莫不冲鋒，破軍也」という軍略についての記述に見える「破」である。これがナポレオンの語形「拏破戾翁」において「破」を使わせた要因の一つになったであろうと推測される。

續いて(6)『瀛環志略』の記述は(23)の通り。

(23) 乾隆五十四年，國大亂，尋廢王弑之，立領事官三人攝王政，以拿破侖爲首（一作拿破利翁，又作那波良）。拿破侖者，佛夙將，用兵如神，征麥西有大功。…拿破侖乘勢擅大權，嘉慶八年，國人推戴，即王位。恃其武略，欲混一土宇，繼羅馬之蹟，滅荷蘭，廢西班牙，取葡萄牙，兼並意大利，瑞士，日耳曼諸小部，割普魯士之半，奪奧地利亞屬藩，侵噠國圍其都城，戰勝無敗，所向無敵，諸國畏之如虎。嘉慶十六年，以大兵伐俄羅斯，圍其舊都墨斯科，俄人燒之而走，佛方旋師而天驟寒，軍士凍死者十七八。諸國乘其敝也，合力攻之，佛師大潰，故所得土全失。(『瀛環志略』卷七)

『瀛環志略』にも「拿破侖」という「破」を用いる表記が現れるが、それとともにこれまで見てきた文獻と同様、ナポレオンの軍略を強調する表現が多く

現れることは重要である。「拿破侖者，佛夙將，用兵如神，征麥西有大功」「戰勝無敗，所向無敵，諸國畏之如虎」と、その記述は (20) (21) よりも詳細である。

『瀛環志略』は『新釋地理備考』の影響を大きく受けているが⁷⁾、(5) (6) から分かるとおりナポレオンの表記に関しては『新釋地理備考』に従っていない。『新釋地理備考』にはナポレオンの存在は伝えられていてもその傳記について記載はない。『瀛環志略』では新たに傳記を記述したことになるが、(23) のような記述を撰する過程で、表記について「破」を選擇するよう影響が及んだ可能性が考えられよう。

ナポレオンの傳記においてその名を「破」で表記する文獻は、好意的か否かにかかわらず、みなその武略に觸れている。

(24) 嘉慶八年，攝政拿破侖即王位，恃其武略，併吞諸國，所向無敵，各國畏之如虎。後與英人戰敗，被擒。英人流之荒島，死。(乗槎筆記 7a11-12)

(25) 中國乾隆年間，其國大亂，尋廢王弑之。民於是自立一主，即國之武弁拿破侖，最好戰，常用兵於他國。至中國嘉慶年間，英為之阻，不從。遂與英戰，兵敗被擒。乃流於大西洋之孤嶼。(地球說略 15a2-4)

(24) は明らかに (23) を下敷きにした文章である。19 世紀末には「破」を用いる表記が優勢となるが、そのような語形とともにほぼ必ずナポレオンの武略の紹介がなされている。(26) および (27) の例は 19 世紀末のものであるが、ともに筆者がイギリス人であるせいかなポレオンに對して好意的な記述とは言えない。

(26) 一千七百六十八年（乾隆三十三年）科西嘉島人某律師生子，名曰拿破侖。(泰西新史攬要二卷二節)

法皇拿破侖（族）補拿破脫（名）毒痛歐境，致遭公憤，合兵再敗之於滑鐵盧，構因海島。⁸⁾（十四卷一節）

(27) 西曆一千七百八十九年，當中國乾隆季年，法民不悅其國君內亂。法國之將拿破崙崛起，為民請命，遂掌大權而操法政。顧拿破崙素黷武，一旦得志遂妄欲混一土宇，於是南征北討，東盪西除，前後二十年間，惟英俄土三國差可自立，除盡從風而靡，歐洲全境大半改隸宇下。拿破崙道稱皇帝，且覬覦羅馬皇位，以冀為歐洲之共主事，卒無成亡也。(三十一國志要 2b3-6)

(20) から (27) にかけての検討から、ナポレオンの音譯表記に「破」が用いられていることと事績の紹介とは、その武略を通して密接な関係があると考えられよう。即ち敵を次々と破ったいわば「破竹の勢い」がその語形に含意され定着に至ったものと思われる。

2. ワシントンの音譯語

2.1. 語形の変遷

ワシントンはアメリカ獨立戦争を勝利に導いた英雄として中國でも評價の高い人物である。中國語における現在の語形は「華盛頓」であり、普通話によれば [xua³⁵ʂɤŋ⁵¹tuən⁵¹] と發音される。表 3 にワシントンの語形の變遷を示す。

〈表 3〉

	表記	書名	刊年
(28)	華盛頓	海録	1820
(29)	華盛頓・華盛屯	東西洋考毎月統記傳	1834-38
(30)	注聲頓・活新循	澳門新聞紙	1839-40
(31)	瓦昇屯	外國志略	1830 年代
(32)	華盛頓	美理哥合省國志略	1830 年代
(33)	注申頓	萬國地理全圖集	1830 年代
(34)	注申頓	四洲志	1844
(35)	華臣頓	洋事雜錄	1847
(36)	瓦盛頓	新釋地理備考	1847
(37)	華盛頓	瀛環志略	1848
(38)	華盛頓	地理全志	1853-54
(39)	華盛頓	地球說略	1856
(40)	華盛頓	校邠廬抗議	1861
(41)	華盛頓	聯邦志略	1864
(42)	華盛頓	萬國公法	1863
(43)	瓦升盾	地理志略	1867
(44)	華盛頓	使美紀略	1880
(45)	華盛頓	申報	1872.4/1,1886.9/6
(46)	華盛頓	出使美日秘國日記	1889
(47)	華盛頓	三十一國志要	1895
(48)	華盛頓	泰西新史攬要	1895

初期には第一字目に「注」を使う語形が見られるものの、ほとんどが「華」を用いた現在の語形「華盛頓」か、あるいはそれに近い表記を持つ。つまり、

1840年代後半というかなり早い段階で語形がほぼ固定していることが読みとれる。現在では人名において英語の [wa] に相當する音節には「瓦」を宛てることが一般的であるから、ナポレオンの音譯語形の場合と同じように、「華盛頓」という現在の語形は現在から見た場合慣用として用いられる語形であることが分かる⁹⁾。

ただ、ここでは (28) のようなかなり早い時期の文獻において現在と同じ「華盛頓」という語形が出現していることが注目されよう。また、これ續く (29) に挙げた語形は 1838 年の記事に現れたものであるが、管見の限りでナポレオンとワシントンのもっとも早い傳記が掲載されている。さらに、林則徐が所藏していた海外情報資料を摘録したという陳德培の (35) にも「華臣頓」という、現在の表記にきわめて近い形の表記が現れている。

(28) (29) (35) と以降の文獻の間における影響關係はさらに追求する必要があるが、鴉片戰爭以前の表記が現在まで用いられ続けているという事實は、ナポレオンのように現在使われる語形の定着が 1850 年代である中できわだつ。

また (32) は著者がアメリカ人である。自國の國父に「華」「盛」などといった字義の良い字を宛てるのは自然であろうが、「華盛頓」という語形は (29) と完全に一致する。(32) の作者ブリッジマンは (29) の編集にも関わっていたから、影響關係を想定するのは不自然なことではない。すると、ブリッジマンなし彼の中國人助手は (28)『海錄』を見、そこから「華盛頓」という語形を得たという可能性も考えられよう。

2.2. 基礎方言と「名從主人」

ここでは各文獻におけるワシントンの表記とその發音を見たい。「華盛頓」の發音はそれぞれ表 4 の通り。

〈表 4：「華盛頓」の各地における發音〉

地點	發音
廣州	uasɛptɛn
上海	fiozəntəŋ
南京	xuasɤŋtun
北京	xuasɤŋtuən

これらを対照させるとナポレオンと同様、上海と他地域との発音の差が際立つ。まず「華」について、上海以外の三カ所の讀音が合口であるのに對し上海では開口になる。主母音が他の三地域で [a] であるのに對し上海で [o] であるのも著しい差異である。

また「盛」を見ると上海では [zəŋ] となって聲母が有聲音である。上海音による發音では元になった英語での發音 [wəʃɪŋtən] と對照した時に、原語との聽覺印象上のずれをひきおこしたであろう。他の三地域であれば「盛」は無聲音である。

ワシントンの音譯語形「華盛頓」の定着段階における基礎方言はおそらく廣州音によるもの¹⁰⁾であろうが、上海音で原語の發音から遠ざかるにもかかわらず定着した要因には、前節におけるナポレオンと同じく、「華盛頓」という語形が1850年代の基礎音系シフト發生前に定着したという経緯が関係しているものと思われる。

もう一つ、「華盛頓」を定着に導いた大きな要因は、アメリカ人自身がアメリカを紹介した文獻(32)(41)に「華盛頓」の表記が採用されたことであろう。一般に中國においては「名從主人」の原則があつて、特に人名については當人の自稱をそのまま沿用することが多い。これは少なくとも來華宣教師に關してはリッチ以來基本的には守られてきた習慣といえる。例えば清朝側のアヘン戰爭以前における公文書でも、來華宣教師の名については基本的に本人の自稱を沿用している。

(49) 又『贖罪之道傳』一種，前列廈門人郭實獵序，書內稱有林翰林曾主考學政，與僚友讚揚天主耶穌等語。(中國第一歷史檔案館・澳門基金會・暨南大學古籍研究所合編1999.第二冊:287.道光十六年二月十九日(1836年4月4日))

ドイツ人來華宣教師ギュツラフにはいくつかの中文名があるものの、「郭實獵」はその自稱の一つである。

アヘン戰爭以前では固有名詞についてはしばしば口偏が付されることもあつた。

(50) 嗎禮遜父子同名，其父故後，現在之嗎禮遜名字之上添一“秧(young)”字，緣夷人謂小為“秧”，故名秧嗎禮遜。(中國第一歷史檔案館・澳門基金會・暨南大學古籍研究所合編1999.第二冊:481.道光二十二年六月二十八日(1842年

8月4日))

ロバート・モリソンの中文名は「馬禮遜」であるから、口偏を除けば語形がそのまま用いられていることが分かる。

ワシントンの音譯語形についても同様なことがいえよう。ワシントン本人が存命時に「華盛頓」という中文名を名乗っていたわけではもちろんないが、アメリカ人來華宣教師ブリッジマンが自國を漢文で紹介した際に「華盛頓」を採用したことは「名從主人」の原則から言って重要である。

これらを踏まえて (32) を主要資料とした梁廷枏の「合省國說」(1846) も「華盛頓」をそのまま用いている。中國人文人による著作に採用されることも語形の定着にとって重要な要素である。以後徐繼畲の (37) などにも「華盛頓」の表記は採用され現在に至ることとなる。

2.3. 用字の選擇

ワシントンの語形は (28) 以來かなり安定した形で「華盛頓」が用いられていることを見てきた。前節ではその要因として「名從主人」による自稱の確定という現象を指摘したが、本小節では用いられた字に關して検討を試みたい。

「華盛頓」の「華」「盛」とともに字義としては良い方に入るだろう。この用字選擇の可能性を本小節では考察したい。

最初に管見の限りで最も早いワシントンの傳記を載せる『東西洋考每月統記傳』の記述は以下。

(51) 經綸濟世之才，寬仁清德遍施，忠義兩全之烈士之中，華盛頓獨立無比，其爲美理哥兼郡之人，於雍正九年生也。(『東西洋考每月統記傳』「華盛頓言行最略」、道光戊戌 (1838) 正月)

・華盛屯，此英傑懷堯舜之德，領國兵攻敵，令國民雍睦，儘心竭力，致救其民也。自從拯援國放民者，不美權而歸莊安生矣。(『東西洋考每月統記傳』「論」、道光丁酉年 (1837) 五月)

(51) の記述からはワシントンの事績を絶賛していることが分かるであろう。ワシントンを中國古代の聖王になぞらえる言説は『東西洋考每月統記傳』のような外國人による文章だけではなく中國人による文章にも見ることができる。

(52) 按，華盛頓，異人也。起事勇於勝廣，割據雄於曹劉，既已提三尺劍，

開疆萬里，乃不僭位號，不傳子孫，而創為推舉之法，幾於天下為公。駸駸乎三代之遺意。…余嘗見其畫像，氣貌雄毅絕倫，嗚呼可不謂人傑矣哉（『瀛環志略』卷九）

徐繼畲のような中國人文人の心をワシントンが捉えたのは、以下に見るように鴉片戦争で中國を負かしたイギリスを破ったという功績だけではない。帝位に就いて世襲を圖るということがなく、選舉制度を採用したというところに驚嘆の重點があつたようである。

（53）乾隆三十一年，英官在各港口征餉。居民寧將茶葉盡投於海，不願納稅。英國亦封港口，且調兵前往其氓。復公議寧死不受苛束。遂糾合部眾，立才能之華盛頓為將軍，與英兵拒戰，兼赴懇於各國。於是佛蘭西、是班亞、荷蘭等國合盟助之，英人不能敵，於乾隆四十六年議聽其自為一國，不受英人節制，遂號為育奈士迭國。（『外國史略』50a10-13）

（53）ではイギリスからの獨立を勝ち取った將軍としてのワシントンが描かれる。（54）ではワシントンが現在でも尊崇されていることを強調する。

（54）米利堅夷眾於三十年前不服英國統轄，有兵頭華臣頓領首糾兵起事，爭戰數年，不分勝負，嗣得佛蘭西兵頭麗飛日到助戰，於夷國七月初四日大獲勝仗，將英兵殺逐，兩國遂定，插立花旗，夷眾因慮一經再有國王，日後又復暴虐，故不議立。

米利堅先年爭復疆域，係兵頭華臣頓為之倡，故國人至今尊之如聖人，今人或生，或開館，或造船，或有新地方，所〈取〉名多有依旁華臣頓字意，取其吉矣。（『洋事雜錄』28-29）

（55）有華盛頓者（一作兀興騰，又作瓦乘敦）米利堅別部人，生於雍正九年，十歲喪父，母教成之，少有大志，兼資文武，雄烈過人…後英師大集，轉戰而前，頓軍敗，眾怯欲散去，頓意氣自如，收和成軍，再戰而克。由是血戰八年，屢蹶屢奮，頓志氣不衰，而英師老矣。…頓既定國，謝兵柄，欲歸天。眾不肯捨，頓推立為國主。頓乃與眾議曰，得國而傳子孫是私也。牧民之任，宜擇有德者為之。（『瀛環志略』卷九）

すでに（52）でみたように、徐繼畲が最も贊嘆したのはワシントンが王位を求めず、子孫に大統領の位を伝えなかったということである。この引用文の後には選舉法についての詳細な説明があるが、これは徐繼畲の關心の所在と無關

係ではあるまい。

(56) 有合眾國人華盛頓者，所向克捷，時沒其功不沒，謝病歸，杜門而不出。至是眾既叛英，推之為帥。血戰八載，屢蹶屢奮，頓志氣不衰，而英師頽喪，法蘭西又舉師渡海，與頓夾攻英軍。西班牙、荷蘭勒兵勸和，英力不能支，遂與頓盟，劃界為鄰國。…頓既定國，謝兵權歸里。眾堅力為國王。頓乃與眾議曰，得國而傳子孫，私也。牧民之任，宜推有德者為之。（『地理全志』33b2-5）

(56) は『瀛環志略』を主要な参考文献にしていることから文面は (55) に相似している。そのせいかワシントンの事績の紹介でもイギリスとの獨立戦争の描寫よりも建國後の選舉制の記述の法が詳細である。

(55) もそうであるが、下線部がワシントンの發言として記録されていることも重要である。子孫に位を傳えず選舉制を採用するというのがワシントンの意思であることになっているのである。

(57) 有華盛頓者，少有大志雄略過人，國人推薦為帥，與英決戰，連戰八年，英不能勝，於是國人立之為主。時耶穌一千七百七十六年間也。按華盛頓在戰陣時，歷受艱辛，不避矢石，其心固切於救民。既罷兵，眾推為統領，而酌議國事則盡善盡美，上下皆賴以治，故民敬之重之，稱為國父。（『地球說略』28b18-29a3）

ワシントンを國父として尊崇しているという記述は (56) にしか見えないが、ワシントンについて一切否定的な記事がないのは他の文獻と同様である。

(58) 美理堅，初為英之屬地，嗣有華盛頓者，憫苛政，倡大義，慶戰八年而國以立，而官天下未嘗家天下，儼然禪讓之遺風，且官則選於眾，兵則寓於農，內資鎮撫而不假人尺寸柄，外扞強御而不貪人尺寸土，華盛頓邁百王哉（『萬國公法』序二）

これも中國人による文章であるが、ワシントンを中國古代の美風の繼承者とみなし高い評價をしていることには變わりない。その根據はやはり自らが得た大統領職を世襲させなかったという点にある。またその創始にかかる（とされる）選舉制も評價の対象である。結果「華盛頓邁百王哉」という贊嘆の語が記されるわけであるが、これらがワシントンの表記に影響していることは間違い

ないだろう。¹¹⁾

3. 結語

中國語において音譯語を創造する上で問題となるのは、ある音節に対していかなる漢字を宛てるのかという文字の選擇であつた。中國語では周知の通りある音節を表す際に複数の漢字が候補として考えられるからである。

本論では人名の音譯語形を對象とし検討を進めてきたが、音聲上との對應のみならず、音譯語形を構成する漢字の意味が當該語形の創造および定着に影響を及ぼしている可能性が考えられることが明らかになったといえるだろう。

ナポレオンの音譯語形「拿破侖」は1850年代には定着したと見てよい。「拿破侖」に固定した要因の一つとしては、1850年代に起こる基礎音系シフトの發生以前にこの語形が定まったことが重要である。上海音では「拿」の主母音が他方言のそれとは異なっており、基礎音系シフトの發生によって新たな音譯語形が上海に基づいて創造される可能性もあった¹²⁾。しかし、現實にはすでに見たとおり、すでに1850年代には基礎音系シフトが適用されないほどにナポレオンの語形は強固なものとなっていたのである。

また、通常の對音表記では用いられない「破」なる漢字がナポレオンの音譯語形においては採用され定着していたことも指摘した。その要因としては中國に紹介されたナポレオンの事績が挙げられよう。ナポレオンは最終的にはワテルローで敗れるとはいえ、少なくともその前半生は敵を次々に破っていく勇將として描かれていた。19世紀前半の中國においてそうしたイメージが形成され、いわばナポレオンの「破竹の勢い」が「破」という漢字にこめられたと考えられる。

一方、ワシントンの音譯語形に関していえば、現在に繋がる「華盛頓」が早くも1820年代の『海録』に現れていた。この語形がアメリカ人宣教師ブリッジマンらによる漢文雑誌『東西洋考毎月統記傳』に繼承されたものとみてよいであろう。ブリッジマンはおそらく『海録』から『東西洋考毎月統記傳』に採用した「華盛頓」の表記を受け継ぎ、自らの『美理哥合省國志略』においても使ったものと考えられる。『美理哥合省國志略』の改訂版『亞墨理格合衆國志略』(1844)、『聯邦志略』(1861)を對照すると、地名の音譯語形に異同がある

のに対し「華盛頓」の語形はどの版を見てもそのままである。

ここに中國人は「名從主人」の原則を見たと思われる。もちろんワシントン自身が「華盛頓」などという中國名を名乗ったことはないが、アメリカ人來華宣教師ブリッジマンが自著『美理哥合省國志略』において「華盛頓」という語形を「自稱」した影響が大きい。「華盛頓」はアメリカ人自身によるワシントンの「自稱」として梁廷枏や徐繼畬のような中國人の文人にも受け入れられ、基礎音系シフトの發生以前に定着を見たのであった。

また、19世紀におけるワシントンの傳記には、自ら兵を率いて血戦し英國の壓政から民を解放した英雄像が描かれている。加えて、大いに強調されていたのは大統領の位を世襲させず賢者の中から選ぶようにしたという點である。中國人の文人も、ここに中國古代の美風を今に伝える理想的な人物像を認め評價していた。このことが外國人であるにも関わらず「華」や「盛」という字を用いた音譯語形に中國人文人が介入しなかった要因といえるだろう。

これらの要素が重なって、「華盛頓」は上海方言では他方言よりも原語とは相對的に異なる讀音を有するにもかかわらず、語形の再創造が行われなかったものと解釋できる。

本論文は文部科學省科學研究費補助金（若手B）「19世紀中國における翻譯語の研究」（課題番號 20720113）の研究成果の一部である。

〈参考文献〉

- 千葉謙悟 2003. 「中國語における外國國名表記の固定と變化 — 對音表記における方言シフトの問題を中心に —」、『或問』5、1-12 頁。東京：白帝社。
- 千葉謙悟 2003. 「19 世紀中國語の新音譯語における表記變遷モデルについて — 西洋人の人名表記という側面から —」、國際シンポジウム：漢字文化圈における近代語の成立と交流、19-30 頁。韓國ソウル：祥明大學校、2003 年 3 月。
- 千葉謙悟 2005a. 「近代音譯語の基礎方言 — 『新釋地理備考』および『瀛環志略』の検討から —」、『中國語研究』47、73-87 頁。東京：白帝社。
- 千葉謙悟 2005b. 「近代音譯語導入過程における二つの經路」、『中國文學研究』31、226-241 頁。東京：早稻田大學中國文學會。
- 沈國威編著 2000. 『『六合叢談』（1857-58）の學際的研究』。東京：白帝社。

「澳門新聞紙」、『鴉片戰爭』（二）、365-522 頁。上海書店出版社・上海人民出版社

2000。

(美) 裨治文 1861.『聯邦志略』上海：墨海書館。

(美) 裨治文 1844.『亞墨里格合衆國志略』。香港藏版。

(清) 斌椿 1861.『乘槎筆記』。文寶堂藏版。

(清) 陳德培, 林永保・孟彭興校點 1986.《洋事雜錄》,《中山大學學報》第3期, 14-34 頁。

(英) 丁韋良編譯 1864.『萬國公法』。北京：崇實館藏版。

(英) 丁韋良編譯 1895.「三十一國志要」、『小方壺齋輿地叢鈔』再補編第82冊。

(清) 馮桂芬 1861.『校邠廬抗議』。鄭州：中州古籍出版 1998。

(英) 傅蘭雅 1885.『佐治刍言』(近代文獻叢刊)。上海書店出版社 2002。

(美) 高理文 1838『美理哥合省國志略』。新嘉坡：堅夏書院。

(德) 郭實獵「萬國地理全圖集」、『小方壺齋輿地叢鈔』再補編 第82冊。

(清) 洪勳「遊歷瑞典那威聞見錄」、『小方壺齋輿地叢鈔』再補編 第82冊。

(清) 洪勳「遊歷西班牙聞見錄」、『小方壺齋輿地叢鈔』再補編 第82冊。

黃時鑒整理 1996.『東西洋考每月統記傳』。北京：中華書局。

(英) 李提摩太口譯・蔡爾康筆述 1896.『泰西新史攬要』。上海：廣學會。

李新魁 1987.《一百年前的廣州音》,《廣州研究》第十期, 65-68 頁。

(清) 梁廷枏 1846.『海國四說』。北京：中華書局 1993。

(清) 林則徐「四洲志」『小方壺齋輿地叢鈔』再補編 第81冊

(清) 林則徐, 張曼評注 2002.『四洲志』。北京：華夏出版社。

(葡) 瑪吉士編 1847.「新釋地理備考」、『海山仙館叢書』第113-118冊。

(英) c. 馬禮遜.「外國史略」、『小方壺齋輿地叢鈔』再補編 第83冊。

(英) 慕維廉編譯 1853-54.「地理全志」、『小方壺齋輿地叢鈔』再補編 第84冊
申報館 1874-1949.『申報』。上海書店 1983。

(清) 王韜 1882.『弢園文錄外編』。上海書店 2002。

(清) 王錫祺編『小方壺齋輿地叢鈔』。上海著易堂。

(美) 裨理哲 1856.『地球說略』。寧波：華花聖經書房。

(清) 謝清高口述・楊炳南筆錄、安京校釋 2002『海錄校釋』。北京：商務印書館

(清) 謝清高・楊炳南、馮承鈞注 1955.『海錄注』。上海：中華書局

叶寶奎 2001.《明清官話音系》, 廈門大學出版社。

(清) 徐繼畲 1848.『瀛環志略』。阿波：對嵯閣藏版 1861。

周同春 1988.《十九世紀的上海音》,《吳語論叢》, 上海教育出版社, 175-183 頁。

1) これは「巴」の誤記であるかも知れない。

2) すべてに口偏が付されているが印刷の都合上略す。

3) 表2における推定音はそれぞれ廣州音：李新魁 1987、上海音：周同春 1988、南京音・北京音：叶寶奎 2001。

4) ただ、英語の Napoleon の発音は第二音節「pou」に第一ストレスをもつため第一音節の na は軽く読まれる。即ち曖昧な母音 [ə] を持つ。従って上海方言における [no] という對音であっても許容される、という解釋も可能であろう。

5) 例えばフランスの人名ポプラン (Poplin) は新华通讯社译名室編 1996 によれば「波

普兰]、シャポー (Chapeaux) は「沙波」となる。同書巻末の「法汉译音表」では pao, pau, paou, paux, peau, peaux, po, pô という綴りに對して「波」を當てる。また英語による姓名の場合、新华通讯社译名资料组編 1996 によると例えばポッター (Potter) は「波特」、アポロ (Apollo) は「阿波羅」となる。

- 6) 例えば新华通讯社译名室編 2000:I-II では「凡在我国已有通用译名的姓名或本人具有自汉字姓名者，按约定俗成原则处理」と述べる。
- 7) 千葉 2005a 参照。
- 8) 明らかに姓名が逆である。
- 9) 英語の音節 [wa] に對しては、例えばワット (Watt) に「瓦特」、[əfɪŋ] に對してはシングラー (Shingler) 「欣格勒」が當てられる。一方で英語 -ton に對し「頓」が當てられるのは珍しいことではない。例えばウェリントン (Wellington) は「韦林頓」。以上の例は新华通讯社译名资料组編 1996 から採った。
- 10) 本論において調査した限りで「華盛頓」の初出と見られる (28) の作者謝清高 (口述)、楊炳南 (筆録) はともに嘉應州の人であるから、『海録』における基礎方言は客家音である可能性もある。
- 11) また、第一字目の「華」が中國人の姓としても受け入れられやすかったことはおそらく語形の定着度と關係していよう。
- 12) 各地域の「土音」による音譯語形の再創造の問題に關しては千葉 2005b 参照。